ワールド・
アーキ・
ドキュメント

ロンドンの雲行き

イギリス・ロンドン London

丹下憲孝 =文・写真解説
NORITAKA TANGE

「テート・モダン」の最上階、遅いランチをとりながら久々にロンドンの風景をゆったりと眺めていた。セントポール大聖堂がにょきっと頭を出し、昔ながらの街並みが残るテムズ川対岸へ向け、先ほど渡ってきたフォスター卿による「ミレニアム・ブリッジ」が緩やかなカーブを描きながら優美に伸びていた。古典と現代との対話がもたらす新しい魅力に満ちたロンドンの街並みを、この日は珍しく青空が覆っていたにもかかわらず、当のランチと同席していたマーケッターのおかげで私の表情は多少曇っていたに違いない。

ハイドパークに程近い「The Halkin」は私のお気に入りにブックマークされていると共にイギリスのブティックホテルの先駆的存在であり、1991年のオープンから既に15年の月日が流れているが、いまだに古さを感じさせない希有な存在でもある。

張力を蓄え、しなる弓のようにカーブした廊下を部屋に向かっている時、何となしに昼間見た風景を思い浮かべていた。ジョージアン様式の外観とモダンな内部空間のコントラストに、ロンドンの街並みに見たそれと同等のイメージを重ね合わせてみたのである。硬さや重厚感をイメージさせる古くからの街並みに、しなやかさ、軽さ、透明感といったような現代的なエッセンスが重ね合わされた時に生じるコントラストの妙、これをここ「The Halkin」でも感じていたためである。

この感覚は、1つの古典建築がホテルに昇華する際に引かれた1本の曲線をきっかけに広がっているように思えた。外部から想像した空間像とは異なる奥行き感や軽やかで柔らかい空気感がホテルの隅々にまで行き渡り、古典の要素に絡み合い、絶妙なバランスを保っているのである。そのように考えていると、このカーブを描く廊下は象徴的ですらあるように感じてきたのであった。客室に至っては、壁面のカーブが母体に包み込まれる感覚とはこのようなものかなと思わせるほど柔らかく私を包み込むと同時に、ロフトに築いた隠れ家のように少し秘密めいた部屋が出迎えてくれた。白漆喰と木製の羽目板によるミニマルなインテリアにダークブラウンを基調とした調度品のコーディネートは強い主張がない点において寡黙と表現できるが、クロスやレザーなどのテクスチャー、ひいてはリネン類に至るまで質の高い素材を用いており、余裕に満ちたこのインテリアは、結果的にとても優雅な印象を与えてくれる。また、同様のカラーコードによるブラウンマーブルのバスルームは広くゆとりがあり、申し分ない設えであるということも付け加えておこう。

それともう一つ、この「The Halkin」を訪れた際はタイ料理レストランの「Nahm（ナーム）」をお忘れなく。世界で唯一、ミシュランで格付けを与えられたタイ料理のレストランというだけあって、味の方は保障付きである。このホテルでくつろぎ、「Nahm」のタイ料理を食べさえすれば、曇った表情も晴れ渡るという代物なのである。❄

Corridor

壁面に同化するようにデザインされた、客室の扉。ルームナンバーとドアノブを配置した部分だけが、スリットのように表現されており、湾曲した壁面の連続性を強調している

Bar

モダンとクラシックが同居する"Bar"。インテリアとエクステリアが緩衝し合うような空間。足下のアーチを活かしたクラシックな印象に、モダンなインテリアが重ね合わされる

Belgravia Suite

"Corridor"と同様、ドア類などは極力目立たないようにデザインされており、基本的にはミニマルな印象を受ける空間。装飾性のある調度品とのバランスが心地良い

Bathroom

4フィクスチャーのバスルームは広さにゆとりもあり使い勝手も良い。色調は客室に合わせて整えられており、全体としてまとまりのある印象を受ける

Exterior

ロンドンの閑静な高級住宅街・ベルグレイヴィア地域に位置し、ハイドパークにも程近い。総客室数は41室

たんげ・のりたか――建築家／1958年生まれ。ハーバード大学視聴環境学、工業エンジニアリングを卒業後、ハーバード大学大学院建築学専門課程を修了。2003年より丹下都市建築設計代表取締役社長。
主な作品：サルバトーレ・フェラガモ・フラッグシップショップ（2003）、東京プリンスホテルパークタワー（2005）、統一グループ台北本社ビル（2005）、上海銀行本社ビル（2005）、キャセイ・シネプレックス（2006）など。